

アユの友釣りは面白い

札幌市医師会
札幌耳鼻咽喉科アレルギークリニック

東 英二

アユは清流に生息し、スイカの香りがするので「香魚」とも言う。体形は流線型で、鰓蓋の後方に黄色楕円形の斑紋がある。これはイエローマークと呼ばれ、幼魚では見られず、ナワバリアユでは鮮明になる。

友釣りはオトリ店からオトリアユと入漁証を購入することから始まる。解禁日は早い河川では5月下旬頃からである。7～8月が最盛期で、10月上旬で釣れなくなる河川が多い。一般的な仕掛けは天井糸－水中糸－目印－ハナカン－逆針－掛針の順に連結されている。ハナカンは小さな円形の器具で鼻に通す。逆針はシリビレ近くに付ける。逆針には掛針を付ける。天井糸はやや太い糸。水中糸は文字通り水中に入る糸なので、水の抵抗を受けないよう極細糸を使用する。最近は完全仕掛けという竿に結ぶと使用可能な仕掛けを使用している。

友釣りの道具は多い。竿は5～50万円で、高価な竿は軽くて感度が良いので、一日中使用しても疲れず楽しく釣れる。9mで200g前後の重さ。アユダモ、引き船、オトリ缶、エアポンプ、ウェーダー・タイツ・タビ、アユベスト、レインジャケット、帽子、偏光グラス、クーラー、仕掛けなどが必要で、どれを忘れても不都合が生じる。

アユは晩秋に下流域で産卵して一生を終えるので「年魚」ともいわれる。生まれた稚魚は河口付近の海で冬を過ごす。春に水温が上昇すると川を遡上する。始めに動物性プランクトンや水生昆虫などを食べ成長し、歯が生え、石アカ（水中の石表面に付く藻類）を食べるようになるとナワバリを作る。ナワバリを持ったアユは、ナワバリ内に侵入してくるアユを威嚇し追い払う性質がある。その行動は侵入したアユの肛門付近に突進し反転する。そこで、掛針を付けたオトリアユをナワバリに侵入させてやるとナワバリアユが引っ掛かるとというのが友釣りの原理である。使用したオトリはバテているので、掛かったアユをオトリにする。これを繰り返す「循環の釣り」である。これがうまくいかなければ釣れない。時間帯、水量、天候等によりアユの好む場所が変化するため、ナワバリアユのいるポイントを見つけ、さらにオトリアユを誘導する技術が必要である。

私がアユ釣りを始めたのは40歳の時で、釣本で仕掛け作りと釣り方を覚えた。余市川でオトリアユを付けて放すとすぐ掛かった。難しいと思っていたが、同様に7～8尾掛かった。興奮したのを覚えている。

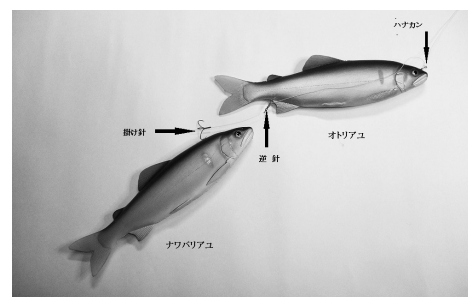
その頃の余市川はオトリへの追いが激しいアユが多く、アユの放流量も多かったため初心者でも数が釣れた。朱太川（黒松内町）、尻別川（蘭越町。大河。）と支流の昆布川、目名川、厚沢部川、利別川（今金町）、天の川（上ノ国町）、遊楽部川（八雲町）、知内川に入ったこともある。秋田県にはフェリーで何度も通った。本流の米代川、支流の阿仁川、早口川、藤琴川、小猿部川、粕毛川である。函館港から青森港までカーフェリーとしては日本最速の1時間45分で「ナッチャンWorld」と「ナッチャンRera」が運航していた。この高速船は快適で、あっという間に着いた。翌年には夏季繁忙期限定で2時間45分で運航していたが、5年で中止された。

青森から東北自動車道を経由して約2時間で大館市または鷹巣町のホテルに着く。米代川に立ち込むと、上ってくるアユが足にトントン当たるのを感じるほどアユが多かった。最近は富山の神通川に通っている。荷物は全てホテルへ送り、飛行機で行く。ホテルへ着くとレンタカーに釣具を積んで準備をする。神通川のすぐ横に飛行場がある。釣りをしていると川の真上を竿が届くような感覚を覚えるほど低空飛行で着陸していくのが見られる。

夏場は雷の多い地域で、遠くで光ったと思えばあっという間に曇り、どしゃぶりになることもしばしば。長竿でカーボン製なのでビリビリする。雷が近い時は竿を置いて避難する。スコールのような雨。急に暗くなり、風が吹きだすと注意。不気味な感じだ。

シーズン初期はいつも神経を使い緊張する。川歩きに体が慣れておらず、釣れるかどうかという不安と期待で複雑である。転倒は初期と疲れた時、川底の石がすべる時に起こる。1シーズンに一度は転ぶ。庄川（南砺市）、九頭竜川（福井県）も時には入る。仁淀川（高知県）にも一度遠征したことがある。毎年7～9月は釣りに出掛ける。この時期の休診は患者も知っているようである。「尺アユ（全長一尺以上の大物を釣ること）」と「束釣り（1日に100尾釣ること）」これが目標であり希望。いまだにどちらも達成できてはいない。

釣りをしていると仕事も忘れ、頭の中が釣りだけのことを考えている癒しの時間である。ただし、釣れないとストレスがたまる。解禁が近づくと心がそわそわとしてくる。



友釣りの原理